

幼児期の栽培体験と成長後の社会性との関係 — 女子学生と園児の母親の場合 —

山本俊光^{1,2}・森 啓一郎¹・松尾英輔¹

¹園芸福祉研究会 ²三井中央高等学校
e-mail : Yamamo58in@yahoo.co.jp

Relationship between Gardening Experience in Early Childhood and a Social Nature — Students of women and mothers of preschool children —

Toshiko YAMAMOTO^{1,2}, Keiichiro MORI¹ and Eisuke MATSUO¹

¹ Japanese Society for the Study of Horticultural Well-Being, ² Miichuo High School

Summary

This study analyzed the relation of a social nature and gardening experience in early childhood (preschool to lower grades of elementary school) using a questionnaire survey with 264 students, all women, of five universities in May 2008 and 227 mothers of kindergarten and nursery children in Dec. 2008. Comparison of the means of “empathy” factor scores revealed tendencies of “personal distress” that were lower among students and mothers with much gardening experience than among those with less. “Perspective-taking” (consideration) scores were high for students and mothers with much gardening experience. Regarding “social skills”, gardening experience was associated with high scores for the students and women. The mean reported nature experiences of the students and mothers with much gardening experience were higher than that of respondents reporting less gardening experience. Results show that the reaction to plants and caring for plants with adults and friends contributed to acquisition of “perspective-taking” (consideration) and “social skills.” A mode of living that devotes more attention to such an environment beneficially influences the acquisition of a social nature later in life.

Keywords : early childhood, gardening experience, social nature later in life

栽培体験, 成長後の社会性, 幼少期

はじめに

幼児教育では、戦前から幼稚園の集団教育が社会性を育成する効果がある(倉橋, 1923; 白根, 1936)と唱えられており、現在の幼稚園教育要領(文部科学省, 2008)においても、幼児教育の目標に「人への愛情や信頼感を育て、自立と協同の態度及び道徳性の芽生えを培うようにする」が挙げられている。保育所保育指針(厚生労働省, 2008)においても文言の違いはあるが社会性の育成について記述されている。

山本ら(2006a; 2009)は、保育所の園芸活動によって保育所保育指針(厚生労働省, 2008)にある保育内容のすべての領域(健康, 人間関係, 環境, 言葉, 表現)に

おいて園児により効果がみられたことを報告した。この調査の際に、園芸活動時に園児のコミュニケーションが活発になったり、自ら進んで世話をする姿や作業を協同する姿、植物や人を大切にしたりする姿が保育者により記述され、幼児期の園芸活動は、社会性の獲得に深いかわりがあると推測された。

幼児期に植物を育てた体験は、青年期に至っても社会性の発達に影響を及ぼしているのであろうか、それとも幼児期以降の成長過程で得た知識やいろいろな体験に影響されて栽培体験による効果はみられなくなるのであろうか。幼児から小学校低学年の頃(以後幼少期という)の植物に関する学習や体験の影響について調べた報告は少なく、高校生への植物に対する嗜好性(山本ら, 2006b), 認知への影響(おかもとら, 2008)を調べた報告があるに過ぎない。

2010年4月13日受付, 2010年11月19日受理.

本報告では学生と、幼稚園や保育所に通園する園児の母親を対象に、被調査者の幼少期の栽培体験と調査時点での社会性との関係について調査した。ここで検討した社会性は以下の2点である。①社会的に好ましい行動に結びつき社会生活を円滑にする共感(empathy) (首藤, 1994), ②対人関係を円滑に運ぶのに関係するといわれる技術(社会的スキル) (菊池, 1988)である。

方 法

2008年5月に福岡県および熊本県の総合大学3校と単科大学2校の女子学生(以後学生とする)に質問紙法に基づき授業中にアンケート調査を行い、対象とした学生全員(268名)から回収し、無回答を除いた264名(有効回答率98%)を検討した。

2008年12月に福岡と佐賀両県にある保育所2か所と幼稚園1か所の園児の母親(以後母親とする)339名に大学生と同じ内容のアンケート調査を行い、自宅で回答させ、2週間以内に回収した。227名から回答(回収率67%)があり、すべて有効回答とした。回答者の年代の内訳は、20代14%、30代72%、40代12%、50代2%であった。

アンケートの内容は、幼少期の自然体験の有無、調査時点での共感、および社会的スキルを評価する尺度の設問の大きく三つに分かれる。以下、順に詳細に説明する。

園児にとっての自然は、遊びと生活という形態を通して体得される自然の事象および生態など環境全体(細野, 1994)といわれる。そこで、本報告では自然体験を遊びおよび生活のなかで体験する自然とふれあう活動すべてとし、自然体験の有無に関する項目は、海津ら(1997)の調査を参考に遊びおよび飼育、植物の栽培からなる13項目とした。

共感とは、自分自身よりも他人の置かれた状況に適した感情的反応(ホフマン, 2001)とされ、共感を捉える幾つかの尺度が作成されている。本報告では、日本語版多次元共感測定尺度(Davis (1983)によるIRIの日本語版) (桜井, 1988)に示されている4下位尺度全28項目のうち、予備調査のうへで各下位尺度から2項目を除いた計20項目について調査した。

社会で円滑な関係を築くための技能は、対人的技能、あるいは社会的スキルとよばれる。本報告では、その尺度としてKikuchi's Scale of Social Skills : 18 items (Kiss-18と称する) (菊池, 2007)の3下位尺度全18項目のうち、予備調査のうへ17項目を選んで、一部表現をかえて調査項目とした。

アンケートのすべての設問はいずれも4件法で行い、「まったくない: 1点」、「あまりない: 2点」、「ときどきある: 3点」、「よくある: 4点」とし、逆転項

目については得点を逆にして数的処理をした。

共感と社会的スキルの結果の検討は、学生および母親を合わせた491名について因子分析(主因子法, Promax回転)を行い、固有値1以上を基準にして因子を抽出した。各因子の負荷量が0.40以上の項目によって下位尺度項目を構成したところ、桜井(1988)、菊池(2007)の結果と一致したので、下位尺度の命名もそれぞれに従った。なお、下位尺度の内的整合性の検討のために信頼度係数(Cronbachの α 係数)を求めた。下位尺度の因子得点を用いてグループ間の比較、相関を検討した。統計処理はSPSS for Windowsで行った。

結 果

1. 幼少期の栽培体験

学生の幼少期の栽培体験を頻度別にみると、「よくした」54名(21%)、「ときどきした」80名(30%)、「たまにした」92名(35%)、「まったくしなかった」38名(14%)で、「よくした」と「ときどきした」を体験が多いグループ、「たまにした」と「まったくしなかった」を体験が少ないグループとすると、体験が多い学生は134名(50.8%)、少ない学生は130名(49.2%)であった(図表省略)。

母親では、「よくした」から順に34名(15%)、80名(35%)、76名(34%)、35名(15%)、無回答2名(1%)であり、体験が多いグループは114名(50.2%)、体験が少ないグループは111名(48.9%)と、学生ときわめて近似していた。

2. 栽培体験とその他の自然体験との関係

学生および母親が幼少期に自然体験をどの程度行っていたかをみたのが第1表である。

全項目の平均値は、体験が多いグループでは学生2.8、母親2.8であり、体験が少ないグループ(学生2.2、母親2.3)より高かった。各項目をみると、学生ではままごと・かくれんぼ、哺乳類の飼育、母親ではままごと・かくれんぼ、ごっこ遊び・基地づくりの各2項目を除く11項目において、体験が多いグループの平均値が、体験が少ないグループより有意に高かった。特に、昆虫採集と昆虫の飼育は、グループ間の平均値の差が、学生では昆虫採集0.7、母親では昆虫採集0.8、昆虫の飼育0.8と大きく、栽培を多く体験した人は、体験の少ない人と比べて昆虫に関わる体験が多いことが伺われた。

つぎに年代による違いをみる。体験が多いグループで平均値が高かった項目を順に挙げると、学生ではままごと・かくれんぼ3.7(よくした75%、ときどきした18%)、栽培3.4(同41%、59%)、草花遊び3.3(同49%、35%)であり、母親ではままごと・かくれんぼ3.9(よくした87%、ときどきした11%)、草花遊び3.6(同

Table 1. The means of nature experiences of each group according to their gardening experiences and the difference between each group.

第1表. 幼少期の栽培体験別にみた自然体験の平均値とグループ間の差.

自然とかかわる遊びや飼育	女子大学生			幼児の母親			母親-女子大学生		
	全体	体験多い	体験少ない	全体	体験多い	体験少ない	全体	体験多い	体験少ない
植物の栽培	2.6	3.4** ²	1.7	2.5	3.3**	1.7	0.1	0.1	0.0
昆虫採集	2.3	2.7**	2.0	2.4	2.8**	2.0	0.1	0.1	0.0
昆虫の飼育	1.9	2.2**	1.6	2.0	2.4**	1.6	0.1	0.2	0.0
哺乳類・昆虫類以外の動物の飼育	2.3	2.6**	2.0	2.5	2.8**	2.2	0.2	0.2	0.2
クラフト	2.2	2.5**	1.9	1.9	2.1**	1.6	-0.3	-0.4*	-0.3*
草花遊び	3.0	3.3**	2.7	3.4	3.6**	3.2	0.4*	0.3	0.5**
ハイキング・登山	2.2	2.5**	1.9	2.0	2.2**	1.8	-0.2	-0.3*	-0.1
野山遊び	2.8	3.1**	2.5	2.9	3.0**	2.7	0.1*	-0.1	0.2
魚釣り・沢遊び	2.2	2.5**	2.0	2.4	2.6**	2.1	0.2	0.1	0.1
キャンプ	2.2	2.4**	2.0	1.8	1.9**	1.6	-0.4**	-0.5**	-0.4**
ごっこ遊び・基地づくり	2.9	3.1**	2.7	2.9	3.0	2.8	0.0	-0.1	0.1
哺乳類の飼育	2.5	2.6	2.3	2.8	3.1**	2.5	0.3*	0.5*	0.2
ままごと・かくれんぼ	3.6	3.7	3.6	3.8	3.9	3.8	0.2	0.2	0.2

² ** 1%水準で有意差, * 5%水準で有意差.

Table 2. Factor analysis of empathy.

第2表. 共感項目の因子分析結果.

項目	因子負荷量			
	I	II	III	IV
I. 個人的苦痛 (3項目, $\alpha=0.70$)				
緊張時にはどうしてよいかわからない	0.75	0.09	-0.13	0.04
緊張状態でも, 比較的うまく対処できる (逆) ²	0.71	-0.12	0.12	-0.09
緊急の状況ではどうしようもなく不安な気持ちになる	0.56	0.00	0.02	0.03
II. 想像性 (2項目, $\alpha=0.81$)				
劇や映画を見ると, 自分が登場人物の一人になったように感じる	0.03	0.87	-0.02	0.03
素晴らしい映画をみるとすぐ自分を主演の人物に置き換えてしまう	-0.05	0.79	0.05	-0.06
III. 共感的配慮 (3項目, $\alpha=0.65$)				
困っている人がいても, あまり可哀想という気持ちにならない (逆)	-0.01	-0.03	0.75	-0.03
不公平な扱いをされた人を見るでもあまり可哀想とは思わない (逆)	-0.04	-0.01	0.60	0.09
傷ついた人たちをみても冷静な方である (逆)	0.06	0.09	0.51	-0.01
IV. 視点取得 (3項目, $\alpha=0.66$)				
人を非難する前にもし自分がその人であったならばどう思うであろうかと考えるようにしている	0.08	-0.06	-0.04	0.81
どんな問題でも対立する二つの見方があると思うので, その両方を考慮するように努めている	-0.16	-0.03	-0.01	0.55
友達をよく理解するために彼らの立場に立って考えようとする	0.05	0.09	0.16	0.50
因子相関	I	1.00	0.16	0.18
	II	0.16	1.00	0.11
	III	0.18	0.11	1.00
	IV	-0.15	0.18	0.45

² (逆) とは逆転項目のことである.

63%, 31%), 栽培 3.3 (同 30%, 70%)であった。つまり、ままごと・かくれんぼは年代にかかわらずもっともよく行われたが、「よくした」割合は母親の方が高く、この傾向は、草花遊びも同様だった。一方、栽培を「よくした」割合は、学生の方が高かった。

学生と母親の平均値で有意差のある項目では、母親の方が「草花遊び」、「哺乳類の飼育」、「野山遊び」は高く、「キャンプ」、「クラフト」、「ハイキング・登山」では学生の方が高かった。

3. 栽培体験と共感の関係

1) 共感の因子分析

共感の因子分析結果を第2表に記す。文中()内の数値は、因子負荷量である。

第I因子は、「緊張時にはどうしてよいかわからない(0.75)」、「緊張状態でも比較的うまく対応できる(逆転項目)(0.71)」、「緊急の状況ではどうしようもなく不安な気持ちになる(0.56)」からなり、桜井(1988)の命名に従い、「個人的苦痛(personal distress)」とした。

第II因子は、「劇および映画を見ると、自分が登場人物の一人になったように感じる(0.87)」、「素晴らしい映画を見るとすぐ自分を主役の人物に置き換えてしまう(0.79)」からなり、「想像力(fantasy)」とした。

第III因子は、「困っている人がいてもあまり可哀想という気持ちにならない(逆転項目)(0.75)」、「不公平な扱いをされた人を見てもあまり可哀想とは思わない(逆転項目)(0.60)」、「傷ついた人たちをみても冷静な方である(逆転項目)(0.51)」からなり、「共感的配慮(empathic concern)」とした。

第IV因子は、「人を非難する前にもし自分がその人であったならばどう思うであろうか」と考えるようにしている(0.81)、「どんな問題でも対立する二つの見方があると思うので、その両方を考慮するように努めている(0.55)」、「友達をよく理解するために彼らの立場に立って考えようとする(0.50)」からなり、「視点取得(perspective-taking)」とした。

各因子の α 係数は、0.81～0.65であり、下位尺度としての信頼性を満足させる水準にあると考えられる。

2) 栽培体験からみた共感

四つの下位尺度(以下因子名で表記)について、栽培体験グループごとに因子得点の平均値をみたのが第1図である。

結果の説明に先立ち、四つの下位尺度と社会性の関係について述べる。「個人的苦痛」は、緊張する対人的状況での個人的な不安や動揺など自己志向の気持ちとされ、社会的関係促進とは負の関係にある。一方、不運な他者への同情や関心という他者志向の気持ちとされる「共感的配慮」、および自己中心的認知からの移行や推論能力の発達によって高まるといわれる「視点取得」は、向社会的行動と関係が深い。向社会的行動と「想像性」とは明らかな関係はない(登張, 2000)といわれている。すなわち、「個人的苦痛」が低い、「共感的配慮」および「視点取得」が高いとは社会的関係に正に働きやすいことを示している。

以上を念頭に本結果をみると、学生ではグループ間に有意な差はみられなかったが、「個人的苦痛」は、体験が多い方が低く、「想像性」、「共感的配慮」、「視点取得」は体験が多い方が高かった。体験が多い方が、「個

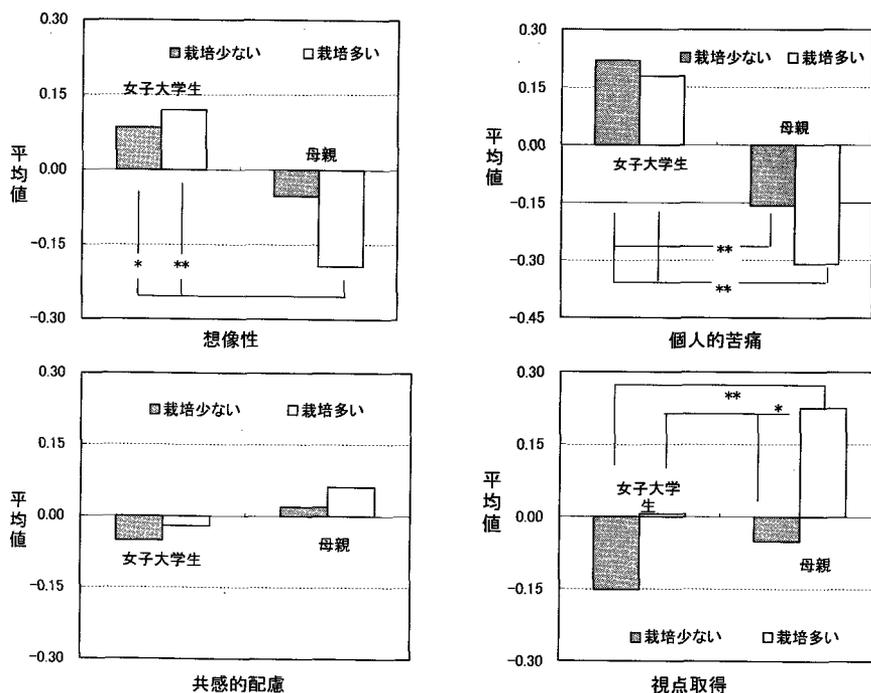


Fig. 1. Relationship between empathy as a grownup and gardening experiences in childhood.

第1図. 共感と幼少期の栽培体験との関係。

グラフ縦軸は、第2表に示した因子負荷量に基づいて求めた因子得点の平均値。

* 1%水準で有意差, * 5%水準で有意差。

人的苦痛」,「共感的配慮」,「視点取得」は社会的に好ましいという結果であり,「想像性」も高かった。母親間では,「想像性」のみ学生と異なる結果であったが,それ以外の3尺度は学生と同様であり,特に,「視点取得」は体験が多い方が5%水準で有意に高かった。

年代差をみると,「個人的苦痛」では体験の多少に関係なく,母親が学生より明らかに低かった(社会的に好ましかった)。「想像性」では,体験にかかわらず学生が体験の多い母親より明らかに高かった。「共感的配慮」では有意な差はみられなかったが,母親の方が高かった(好ましい)。さらに「視点取得」では,体験が多い方が,年代が高い方が社会的に好ましくなる傾向があり,体験が多い母親は体験の少ない学生より1%水準で有意に高かった。

質問項目別にみると,「緊張時にはどうしてよいかわからない」では,栽培体験の多少にかかわらず学生は母親より明らかに高く,「緊急の状況ではどうしようもなく不安な気持ちになる」では,体験の多い母親は,学生の両グループより明らかに低かった。すなわち,多くの母親は,学生より緊張時の対処はできると思っており,緊張時の不安感がより低いのは体験が多い母親であった。

「人を非難する前にもし自分がその人であったならばどう思うであろうかと考えるようにしている」では,栽培体験の多い母親は,少ない母親および少ない学生

より明らかに高く,「どんな問題でも対立する二つの見方があると思うので,その両方を考慮するように努めている」では,体験が多い母親は,体験の多少にかかわらず学生より明らかに高かった。以上より,相手の立場を自分のことのように想像することができる人は,体験が多い母親に多く,相手の立場がよく理解できない人は,体験が少ない学生に多かった。

4. 栽培体験と社会的スキルの関係

1) 社会的スキルの因子分析

社会的スキルの因子分析結果を第3表に記す。文中()内の数値は,因子負荷量を表している。

第I因子は,「相手から非難されたときにそれをうまく片付けることができる(0.73)」,「怖さおよび恐ろしさの感情をうまく処理することができる(0.66)」,「あちこちから矛盾した話が伝わってきてもうまく処理できる(0.62)」,「気まずいことがあった相手と和解できる(0.54)」,「周りの人たちとのトラブルをうまく処理できる(0.53)」,「周りの人たちが自分とは違った考えをもつていてもうまくやっていける(0.40)」であり,菊池(2007)の命名に従い,「トラブル処理」とした。

第II因子は,「知らない人でもすぐに会話が始められる(0.93)」,「他人が話しているところに気軽に参加できる(0.62)」,「初対面の人に自己紹介できる(0.60)」,「他人と話していてあまり会話が途切れない(0.55)」で

Table 3. Factor analysis of social skills.
第3表. 社会的スキル項目の因子分析結果.

項目	因子負荷量		
	I	II	III
I. トラブル処理 (6項目, $\alpha=0.76$)			
相手から非難されたときにそれをうまく片付けることができる	0.73	0.09	-0.12
怖さや恐ろしさの感情をうまく処理できる	0.66	-0.11	0.01
あちこちから矛盾した話が伝わってきてもうまく処理できる	0.62	-0.18	0.17
気まずいことがあった相手と和解できる	0.54	0.14	-0.08
周りの人たちとのトラブルをうまく処理できる	0.53	0.10	0.19
周りの人たちが自分と違う考えを持っていてもうまくやっていける	0.40	0.14	-0.04
II. コミュニケーションスキル (4項目, $\alpha=0.79$)			
知らない人でもすぐに会話が始められる	-0.02	0.93	-0.10
他人が話しているところに気軽に参加できる	0.13	0.62	0.02
初対面の人に自己紹介できる	0.04	0.60	0.02
他人と話していてあまり会話が途切れない	-0.14	0.55	0.27
III. 問題解決 (4項目, $\alpha=0.80$)			
学級活動や会合などでどこに問題があるか見つけることができる	0.03	-0.13	0.83
学級活動や会合などで何をどうやったらよいか決められる	-0.09	0.06	0.73
他人にやってもらいたいことをうまく指示することができる	0.01	0.16	0.62
他人を上手に助けることができる	0.18	0.11	0.47
因子相関	I	1.00	0.52
	II	0.52	1.00
	III	0.59	0.55
			1.00

あり、「コミュニケーションスキル」とした。

第Ⅲ因子は、「学級活動および会合などでどこに問題があるか見つけることができる(0.83)」、「学級活動および会合などで何をどうやったらよいか決められる(0.73)」、「他人にやってもらいたいことをうまく指示することができる(0.62)」、「他人を上手に助けることができる(0.47)」であり、「問題解決」とした。

α 係数は、0.76～0.80であり、下位尺度としての信頼性を十分満足させる水準にあると考えられる。

2) 栽培体験からみた社会的スキル

三つの下位尺度(以下因子名で表記)について栽培体験グループごとに因子得点の平均値をみたのが、第2図である。

学生も母親も、体験が多い方が「問題解決」、「コミュニケーションスキル」、「トラブル処理」のすべてで平均値は高かった。特に母親では、体験が多いグループの「問題解決」は、少ないグループより5%水準で有意に高かった。学生と母親を比較した場合、体験の多い母親では、「トラブル処理」は、学生の両グループより1%水準で有意に高かった。

詳細には、「問題解決」の項目のうち、「学級活動および会合などで何をどうやったらよいか決められる」では、体験の多少にかかわらず学生が母親より明らかに高く、「学級活動や会合などでどこに問題があるか見つけることができる」では、体験が少ない母親が学生の両グループより低かった。「他人を上手に助けることができる」では、母親の方が高く、特に体験の多い母親は学生の両グループより明らかに高かった。「他

人にやってもらいたいことをうまく指示することができる」では、体験が多い母親が体験の少ない学生より明らかに高かった。

以上から、問題の所在や解決法を見つけることができる人は学生に多く、問題の所在を見つけることが不得手な人は体験が少ない母親に多かった。母親、とりわけ栽培体験の多い母親は、相手をうまく助けることはできるとしており、うまく指示できないと思っていた人は、体験の少ない学生に多かった。

「トラブル処理」のうち、「あちこちから矛盾した話が伝わってきてうまく処理できる」では、体験の多い母親が、学生の両グループより明らかに高かった。「周りの人たちとのトラブルをうまく処理できる」では、体験の多い母親が少ない学生より明らかに高かった。したがって、矛盾した話やトラブルに際して対処できると思う人は、体験が多い母親に多かった。

5. 共感と社会的スキルの関係

共感と社会的スキル間の相関を第4表に示した。

「想像性」では学生だけに、「問題解決」との間に0.21、「コミュニケーションスキル」との間に0.20の弱い相関がみられた。「個人的苦痛」では、母親も学生も社会的スキルのすべての因子との間に負の相関がみられた。具体的には、「問題解決」との間で学生-0.41, 母親-0.50, 「トラブル処理」との間で、学生-0.39, 母親-0.58と相関が強く、「コミュニケーションスキル」との間では、学生-0.22, 母親-0.28であった。

「共感的配慮」では、母親も学生も社会的スキルのど

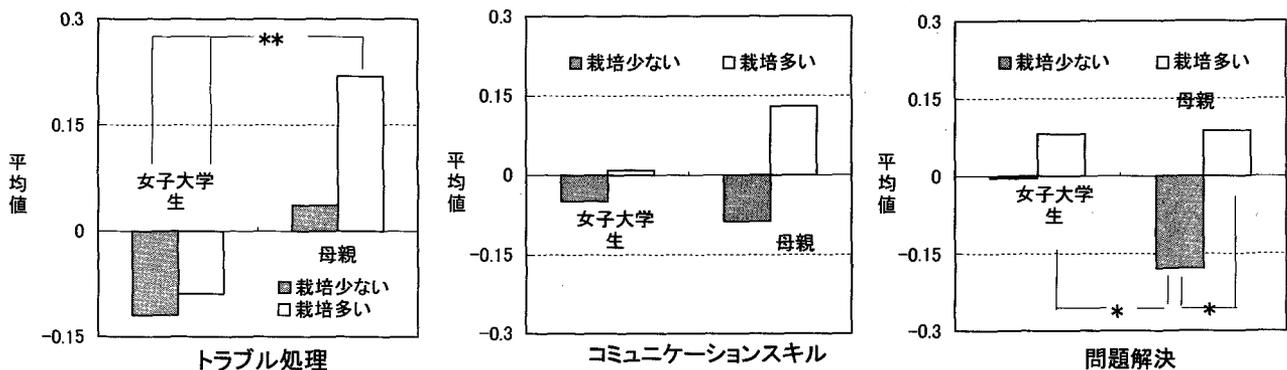


Fig. 2. Relationship between social skills as a grownup and gardening experiences in childhood.

第2図. 社会的スキルと幼少期の栽培体験との関係。

グラフ縦軸は、第3表に示した因子負荷量に基づいて求めた因子得点の平均値。

** 1%水準で有意差, * 5%で有意差。

Table 4. Correlation of empathy and social skills.

第4表. 共感と社会的スキルの相関。

共感	社会的スキル					
	問題解決		コミュニケーションスキル		トラブル処理	
	女子学生	母親	女子学生	母親	女子学生	母親
想像性	0.21** ²	0.09	0.20**	0.09	0.17*	0.02
個人的苦痛	-0.41**	-0.50**	-0.22**	-0.28**	-0.39**	-0.58**
共感的配慮	0.03	0.05	0.10	0.06	0.02	0.10
視点取得	0.29**	0.27**	0.15*	0.17*	0.25**	0.34**

² 数値は相関係数, ** 1%水準で有意差, * 5%水準で有意差。

の因子とも有意な相関はみられなかった。「視点取得」では、「問題解決」との間で学生 0.29, 母親 0.27, 「トラブル処理」との間で学生 0.25, 母親 0.34 と正の相関を示した。

社会的促進的機能と個人的苦痛の間は負, 視点取得との間は正の関係にあるという報告(齋藤・登張, 2002)と同様に, 本調査においても「個人的苦痛」は社会的スキルと負, 「視点取得」は正の関係にあった。

考 察

共感の因子分析の結果(第1図)から, 栽培体験の差, および学生と母親間の年代差の影響を総合して考えると, 「個人的苦痛」および「共感的配慮」の発達には, 体験が影響している可能性はあるが, 年代差の影響の方がより大きいと考えられた。「想像性」には, 年代差が影響していたことは明らかだったが, 体験が多い学生の「想像性」の高さと体験が多い母親の低さに体験が影響しているかどうかははっきりしなかった。「視点取得」では, 体験と年代差がともに影響していたとみられる。

以上より, 共感では, 体験の影響は「視点取得」, 年代差の影響は, 「個人的苦痛」で顕著であった。

社会的スキルの因子分析(第2図)では, 「トラブル処理」の発達には体験と年代の差の両者が影響していた。また, 「問題解決」, 「コミュニケーションスキル」にも体験の差が影響することが示唆された。菊池(2007)は, 社会的スキルが発揮されるには共感のあり方が大切と述べている。本調査においても体験が多いグループで「個人的苦痛」が低く, 「視点取得」が高い傾向がみられたが(第1図), これら共感の下位尺度は, 社会的スキルとの間に相関が認められたことから(第4表), 体験が多いグループにおける問題の解決およびトラブル処理のうまさに関連しているものと考えられた(第2図)。

以上を総合すると, 幼少期の栽培体験によって学生では自己指向的な「個人的苦痛」は抑えられた一方で, 「想像力」と他者指向的な「視点取得」が培われ, それ以降の成長の過程においては, 「個人的苦痛」の抑制と, 「視点取得」の強化がみられた。なかでも「個人的苦痛」では不安の減少, 「視点取得」では相手の立場を自分だったらどう思うかと推し量る力が発達していったと考えられる。また, 「個人的苦痛」と「視点取得」の発達は, 社会的スキルとしてトラブルの対処法を身につけることや, 問題の指摘や解決に役立っていたとみられる。

このように, 共感や社会的スキルは, 基本的には人生経験を通して発達させていくものであるが, 栽培体験が多い方が発達は早まると考えられる。

人間同士の関わりは小さい時期からの学習が必要(佐

藤, 2000)といわれる。幼い頃の栽培体験は, 一人であるというよりも大人とのかかわりのなかで行われたと推察される。学生, 母親ともに, 栽培体験を多くする環境に育った女子は, その他の自然体験も豊富(第1表)であり, とりわけ昆虫への興味・関心が増していた。

このように, 体験が多いグループではその他の自然体験も豊富であったことも考え合わせると, 栽培体験が多い人は, 幼い頃から家族や仲間と多くかかわってきたと考えられ, このことが共感や社会的スキルの発達を促したのかもしれない。

ままたまごとで言葉の能力, 想像力, 創造力, 社会性, 情緒性, 協調性が培われ(長谷川・古川, 2007), 虫の飼育が社会性を育てる(山下ら, 2008)という報告が示すように, 本調査の結果にも, 栽培だけでなくその他の自然体験がもたらす効果が複合的に働いたことは考えられる。ただ, 栽培とその他の自然体験との関係, および栽培体験の内容と社会性との関係については今後の検討課題としたい。

学生, すなわち青年期の前半において共感および社会的スキルの獲得に幼少期の栽培体験のよい影響が見受けられた。そして, 学生より10歳以上年長で子どもを育てている母親においても体験の多少によって社会性の発達の傾向は変わらなかった。これらのことより, 幼少期の栽培体験は, 学生および母親の社会性の獲得に影響を与え, 社会性の獲得の基盤となり得たことを示したといえよう。

これまで, 教育において栽培活動は長年にわたり奨励実行されてきたが, その教育効果が成長後にもみられるか否かについて, 調査はほとんど行われていなかった。本報告で幼少期の栽培体験が, 女子大学生および園児の母親の共感や社会的スキルの獲得により影響を及ぼしたことが示された。今後, 幼児期のよりよい栽培体験活動のあり方について知見が蓄積されることが期待される。

摘 要

幼児期の栽培体験の有無が, 成長後の社会性の発達に及ぼす影響を明らかにするために, 2008年に女子大学生および園児の母親にアンケート調査を行い, それぞれ264名と227名について検討した。その結果, 幼少期に栽培体験が多かった学生および母親は, 緊急時の不安感は低く, 相手の立場に対して配慮を行い, トラブルを処理し, 問題を解決することはできると認知している人が多かった。幼少期に栽培を多く体験した女性は, その他の自然体験も多く, 幼少期に大人や仲間とのかかわりが多かったことが社会性の獲得に良い影響を及ぼしたとみられる。幼少期すなわち, 幼児期の栽培体験は, 社会性の獲得の基盤となることが示唆された。

謝 辞

本研究の遂行にあたり、調査にご協力いただいた学生、園児の保護者の皆様に感謝の意を表する。

引用文献

- Davis, M. H. 1983. Measuring individual differences in empathy : Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology* 44(1) : 113-126.
- 長谷川万祐・古川 聡. 2007. ままごと遊びの意義と役割の発展過程. *日本教育心理学会総会発表論文集* 49 : 304.
- ホフマン, M.L. (菊池章夫・二宮克美訳). 2001. 共感と道徳性の発達心理学－思いやりと正義とのかかわりで－. 川島書店. 東京.
- 細野英夫. 1994. 自然環境における原体験－教師養成への一考察－. *白鷗女子短期大学論集* 19(1) : 56-69.
- 海津ゆりえ・宮川 浩・真板昭夫・上杉哲郎. 1990. 子供・親子・高齢者の身近な自然とのふれあい活動に関する研究. *ランドスケープ研究* 60(5) : 647-652.
- 菊池章夫. 1988. 思いやりを科学する. 川島書店. 東京.
- 菊池章夫. 2007. 社会的スキルを測る : KiSS-18 ハンドブック. 川島書店. 東京.
- 厚生労働省. 2008. 保育所保育指針. フレーベル館. 東京.
- 倉橋惣三. 1923. 個人性格と社会性格. *幼児教育* 23(2) : 69-80.
- 文部科学省. 2008. 幼稚園教育要領. 文部科学省. 東京.
- おかもとみわこ・高橋弥生・糸井志津乃. 2008. 保育者をめざす学生のもつ動植物に対するイメージに関する研究(3). *目白大学短期大学部研究紀要* 45 : 83-96.
- 齋藤耕一・登張真穂. 2002. 共感性の生涯発達(3). *日本性格心理学会大会発表論文集* 10 : 68-69.
- 桜井茂男. 1988. 大学生における共感と援助行動の関係－多次元共感測定尺度を用いて－. *奈良教育大学紀要* 37(1) : 149-153.
- 佐藤正二. 2000. 幼児の社会的スキル訓練について. *幼年教育研究年報* 22 : 3-9.
- 白根孝之. 1936. 幼児の社会性陶冶の問題. *幼児の教育* 36(7) : 2-19.
- 首藤敏元. 1994. 幼児・児童の愛他行動を規定する共感と感情予期の役割. 風間書房. 東京.
- 登張真穂. 2000. 多次元的視点に基づく共感性研究の展望. *性格心理学研究* 9(1) : 36-51.
- 山本俊光・森 啓一郎・松尾英輔. 2006a. 保育所における園芸の保育効果－福岡市の事例から－. *人間・植物関係学会雑誌* 5(2) : 13-18.
- 山本俊光・森 啓一郎・松尾英輔. 2006b. 幼少期の住環境および植物を育てた経験の有無と植物の好き嫌いとの関係. *人間・植物関係学会雑誌* 6(1) : 41-46.
- 山本俊光・森 啓一郎・松尾英輔. 2009. 園芸活動をした園児をみる保育者の姿勢に関する一考察－福岡市と北九州市の保育所の事例から－. *人間・植物関係学会雑誌* 8(2) : 23-30.
- 山下久美・首藤敏元. 2008. 虫との関わりが幼児の社会性の発達に与える効果について. *埼玉大学紀要教育学部* 57(2) : 105-121.